

【漁況】

[マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成28年は12万5千トンとなりました。

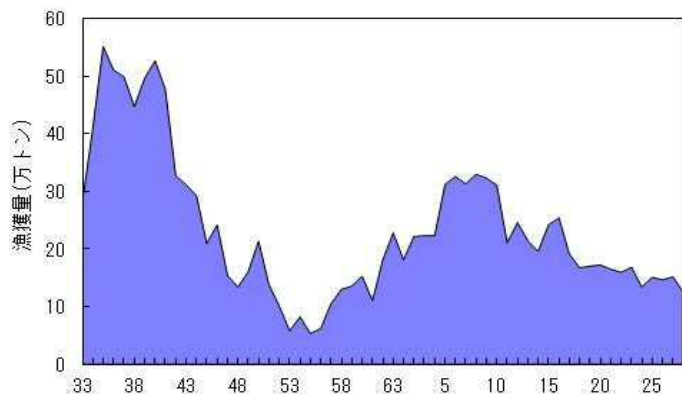


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 県内の平成30年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、天草沖、串木野沖でマアジ仔（0歳魚：平成30年生まれ）主体に漁場が形成されました。

薩南海域では、枕崎沖、坊津沖、野間池沖でマアジ豆（0, 1歳魚：平成30, 29年生まれ）主体に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で1,125トンの水揚げで、前年の251%及び平年の266%となりました。

3. 県内の平成31年1～3月期の見とおし

漁獲の主体はマアジ豆、小（1, 2歳魚：平成30, 29年生まれ）でしょう。

来遊量は、前年を上回り、平年並でしょう。

（根拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターン等から予測しました。

来遊量は、漁獲量の分析により予測しました。前期（前年10～12月）と今期（1～3月）の漁獲量に正の相関があることから、これをもとに予測すると今期の来遊量は前年を上回り、平年並になると考えられます。

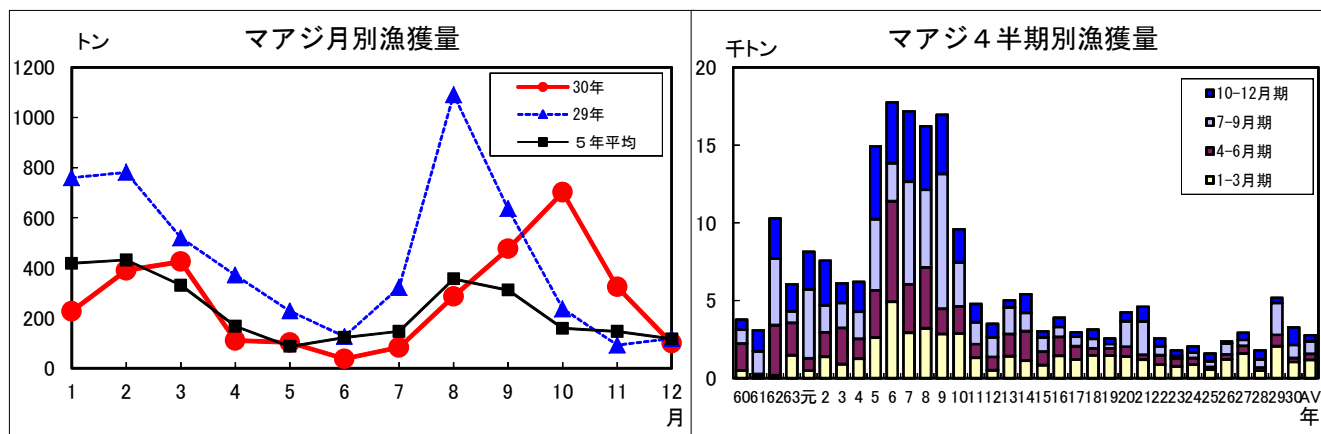


図 マアジまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，平成30年12月26日までの水揚げ量を使用

[サバ類]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークに年々減少し、平成3年には26万トンとなりました。

平成5年から増加に転じ平成9年には85万トンとなりましたが、平成14年には28万トンまで減少しました。

平成18年に65万トンまで増加したあと減少傾向となりましたが、平成28年は50万3千トンとなりました。

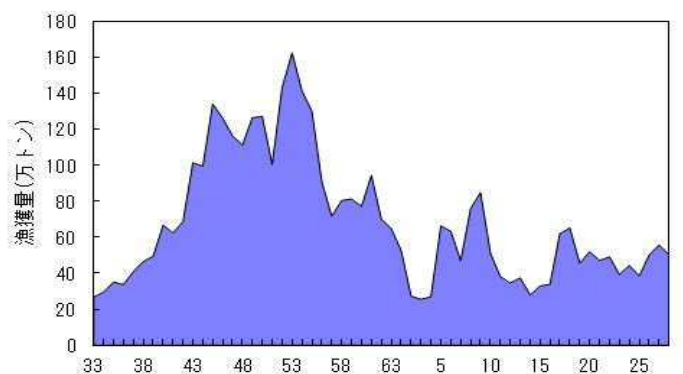


図 全国のサバ類漁獲量の推移

2. 県内の平成30年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、天草沖、甕島周辺、串木野沖でサバ類小、豆（0～2歳魚：平成30～28年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、10月に枕崎沖、内之浦沖、坊津沖でマサバ大（2～5歳魚：平成28～25年生まれ）、ゴマサバ大（2～4歳魚：平成28～26年生まれ）、ゴマサバ豆（0、1歳魚：平成30、29年生まれ）主体の漁場が形成されました。11月に野間池沖でゴマサバ大、マサバ大主体の漁場が形成されました。12月に内之浦沖でゴマサバ小、中（1～4歳魚：平成29～26年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で4,512トンの水揚げで、前年の115%及び平年の202%となりました。

3. 県内の平成31年1～3月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ中（2～5歳魚：平成29～26年生まれ）でしょう。

来遊量は、前年・平年並でしょう。

（根拠）

今期は、産卵群と考えられるゴマサバ2～5歳魚が漁獲の主体になります。

来遊量は、漁獲量等の分析により予測しました。今期（1～3月）は、前年4～9月の漁獲量と正の相関があることから、これをもとに予測をすると、今期の来遊量は前年・平年並であると考えられます。

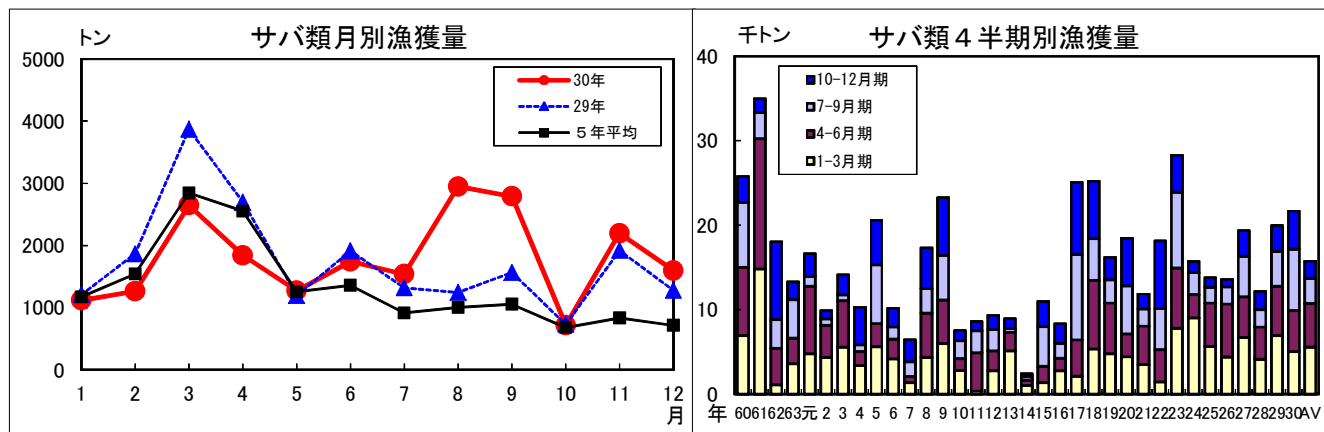


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、平成30年12月26日までの水揚量を使用

[マイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

平成元年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、平成14から22年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、平成23年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、平成25年以降は20万トンを超える漁獲が続き、平成28年には38万トンとなりました。

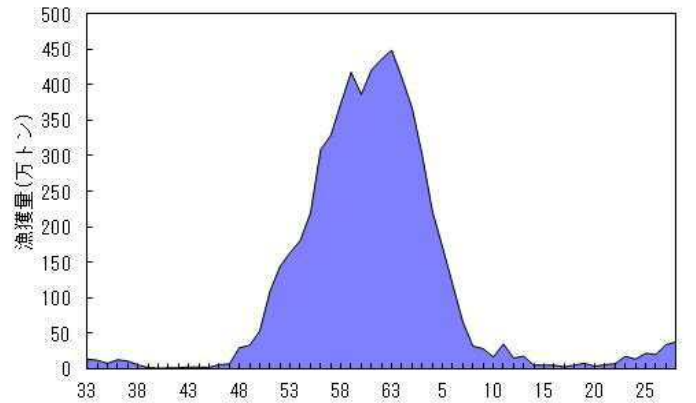


図 全国のマイワシ漁獲量の推移

2. 県内の平成30年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、漁場は形成されませんでした。

薩南海域のまき網では、野間池沖、枕崎沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、中羽（0歳魚：平成30年生まれ）主体に44トンの水揚げで、前年の26%、平年の3%でした。

北薩海域の棒受網は、阿久根沖、長島沖、長島（内海）で漁場が形成され、4トンの水揚げで、前年の74%、平年の8%でした。

3. 県内の平成31年1～3月期の見とおし

漁獲の主体は、中羽（1歳魚：平成30年生まれ）でしょう。

来遊量は前年並で、平年を下回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる1歳魚（平成30年生まれ）は、前期にウルメイワシに混じってわずかな水揚げがあった程度で、今期もまとまった漁が見込めないことから、来遊量は非常に低調だった前年並で、平年を下回ると考えられます。

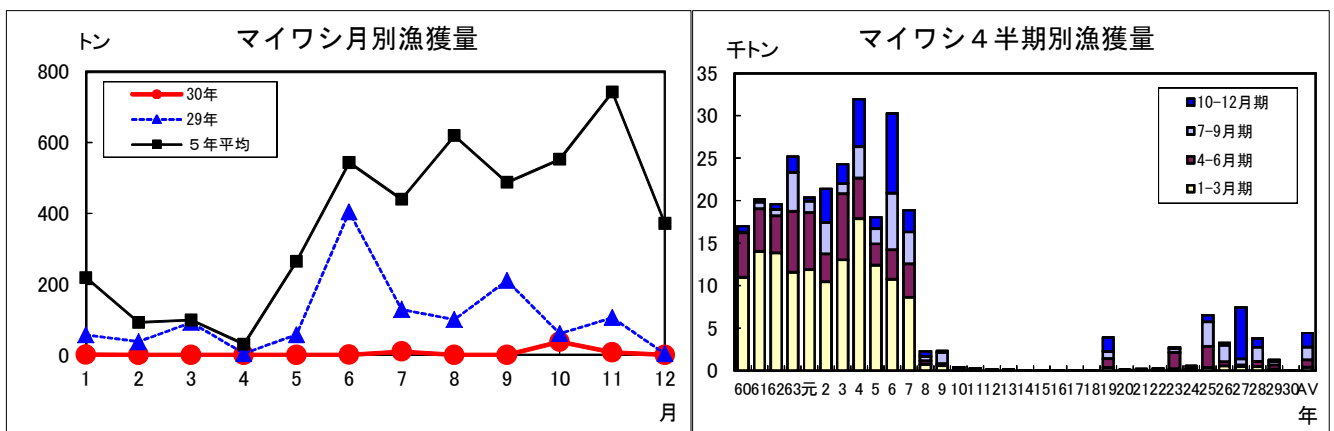


図 マイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値（AV），平成30年12月26日までの水揚げ量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代以降、増減を繰り返しながらも増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ平成12年には2万4千トンまで減少しました。

平成15年以降は再度増加傾向に転じ、平成28年は9万8千トンで昭和33年以降では最高の漁獲量となり、高い水準を維持しています。

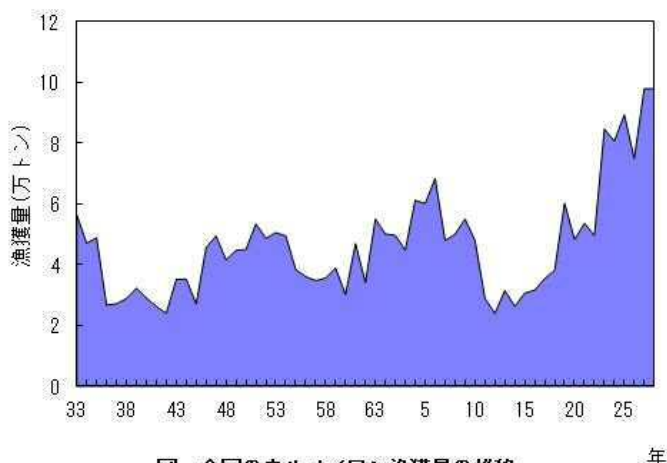


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 県内の平成30年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、天草西沖、甌島周辺で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、野間池沖、枕崎沖、立目崎沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、中羽（0歳魚：平成30年生まれ）主体に2,369トンの水揚げで、前年の101％、平年の77％でした。

北薩海域の棒受網では、阿久根沖、長島沖、長島（内海）で漁場が形成され、445トンの水揚げで、前年の298％、平年の82％でした。

3. 県内の平成31年1～3月期の見とおし

漁獲の主体は、中羽（1歳魚：平成30年生まれ）でしょう。

来遊量は前年並で、平年を下回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる1歳魚（平成30年生まれ）は、10～11月に平年並の漁があったものの、12月には一転して低調となったことから、来遊量は低調だった前年並で、平年を下回ると考えられます。

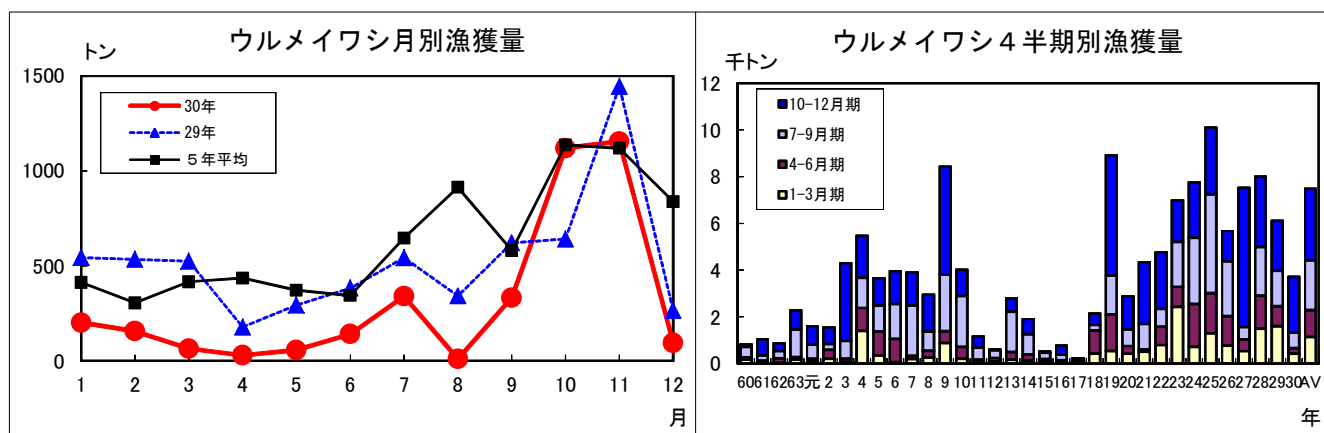


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，平成30年12月26日までの水揚量を使用

[カタクチイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、平成28年は17万1千トンとなりました。

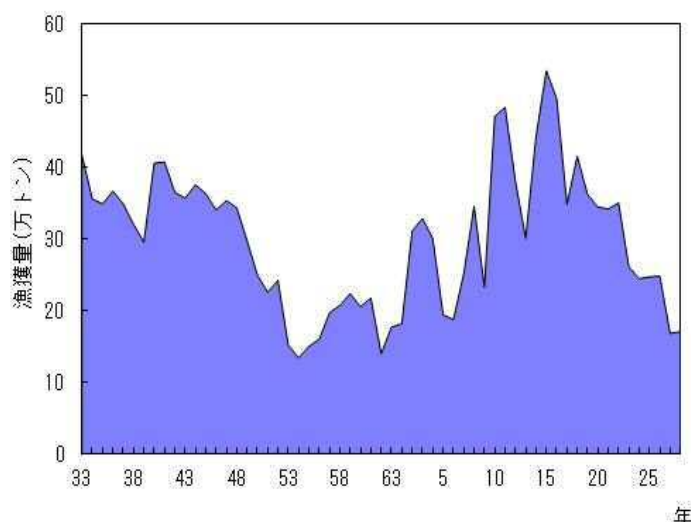


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 県内の平成30年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、長島（内海）に漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、漁場は形成されませんでした。

4港計のまき網では、小～中羽（平成30、29年生まれ）主体に15トンの水揚げで、前年の1,370％、平年の1％でした。

北薩海域の棒受網では、阿久根沖、長島沖、長島（内海）で漁場が形成され、33トンの水揚げで、前年の3,642％、平年の82％でした。

3. 県内の平成31年1～3月期の見とおし

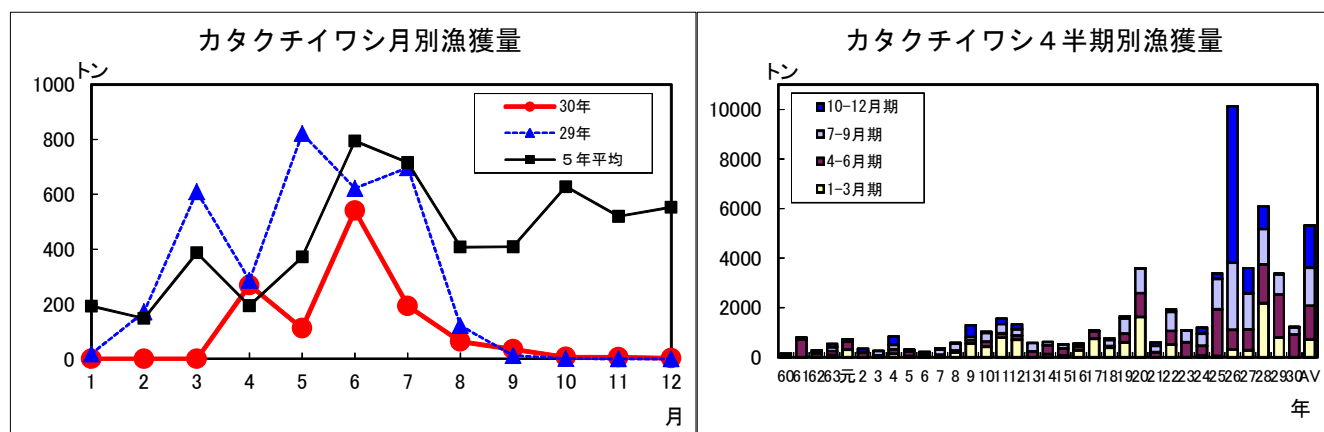
漁獲の主体は、小～中羽（平成30年生まれ）でしょう。

来遊量は前年を上回り、平年を下回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる小～中羽の漁況は、9月以降散発的な漁獲となっているものの、棒受網では低調ながらも漁獲が続いていることから、来遊量は水揚げがなかった前年を上回り、平年を下回ると考えられます。



[シラス]

1. 経年経過

バッチ網漁業の漁獲量は、西薩海域では、平成 11 年の 5,450 トンをピークに減少傾向を示し、平成 14, 15 年と 1,000 トンを下回り低調に推移しました。その後、平成 16 年は 3,507 トンと比較的好調に推移しましたが、平成 17 年以降減少傾向を示し、平成 29 年は 2,068 トンとなりました。

志布志湾海域では、平成 19 年まで増加傾向を示しましたが、その後、1,000 トン前後で増減を繰り返しながら推移し、平成 29 年は 1,007 トンとなりました。

2. 平成 30 年 9 ～ 11 月の漁況の経過

西薩海域では、カタクチシラス主体に 702 トンの水揚げで、前年の 163 %、平年の 216 %でした。

志布志湾海域では、カタクチシラス主体に 507 トンの水揚げで、前年の 71 %、平年の 67 %でした。

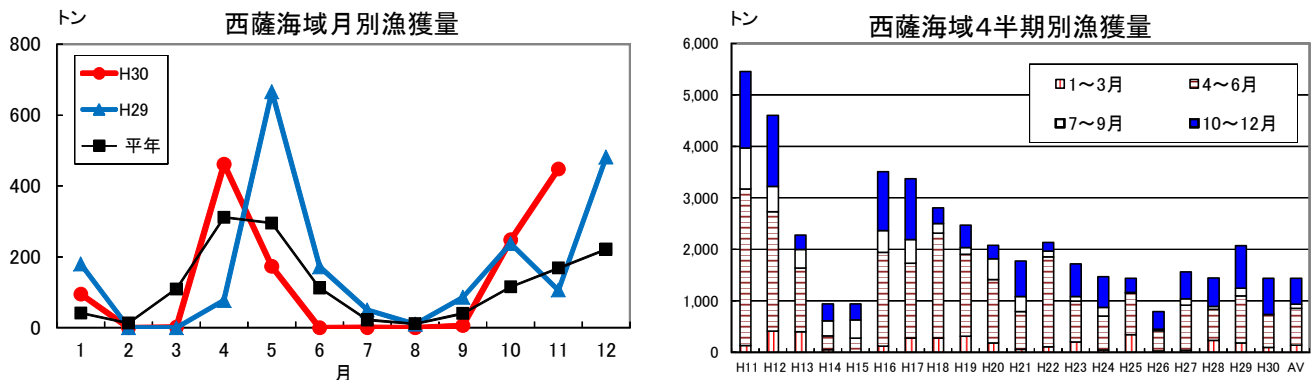


図 西薩海域バッチ網漁業の漁獲量変化(4 漁協計)

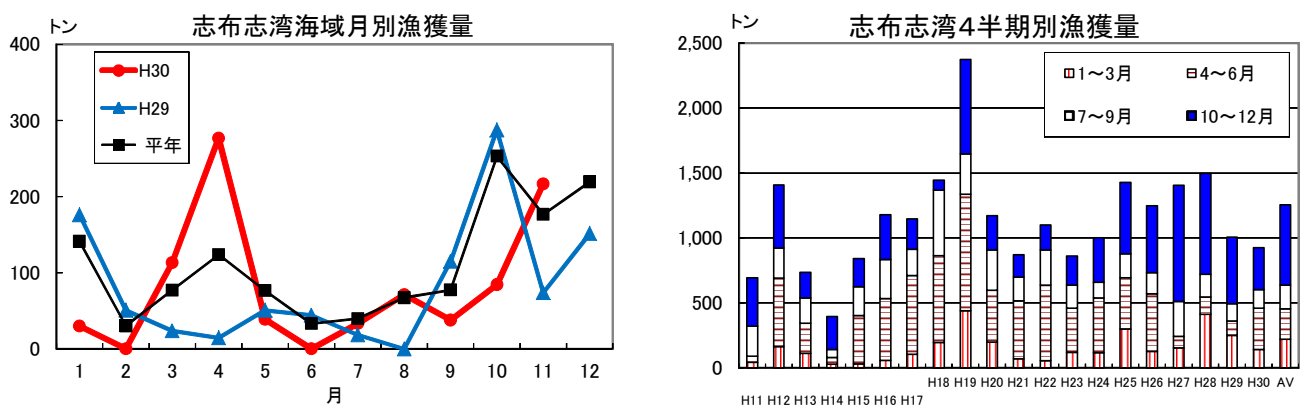


図 志布志湾海域バッチ網漁業の漁獲量変化(2 漁協計)

※平年値は過去 5 年の平均値(AV)、平成 30 年 11 月 30 日までの水揚げ量を使用

[イワシ類参考資料]

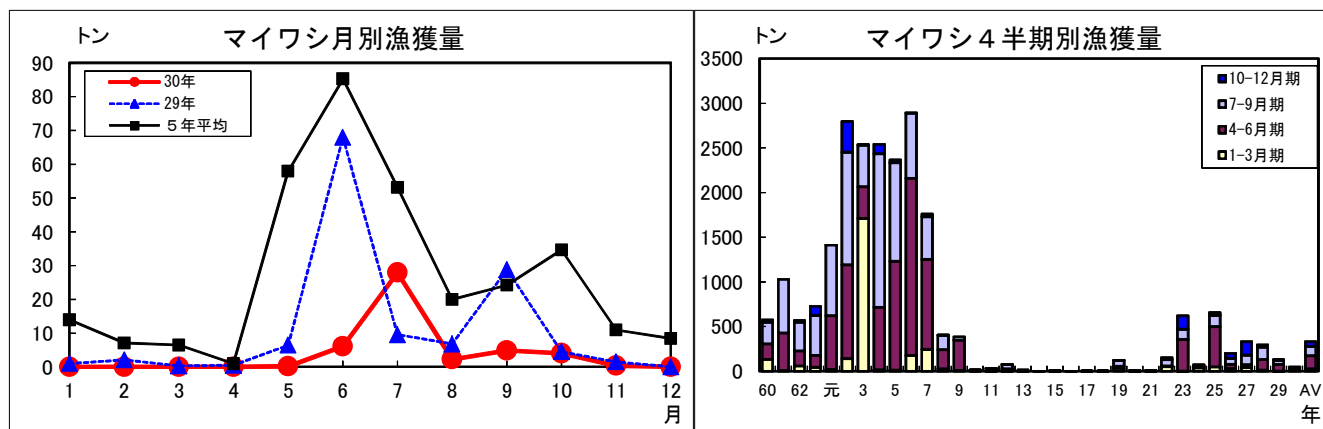


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

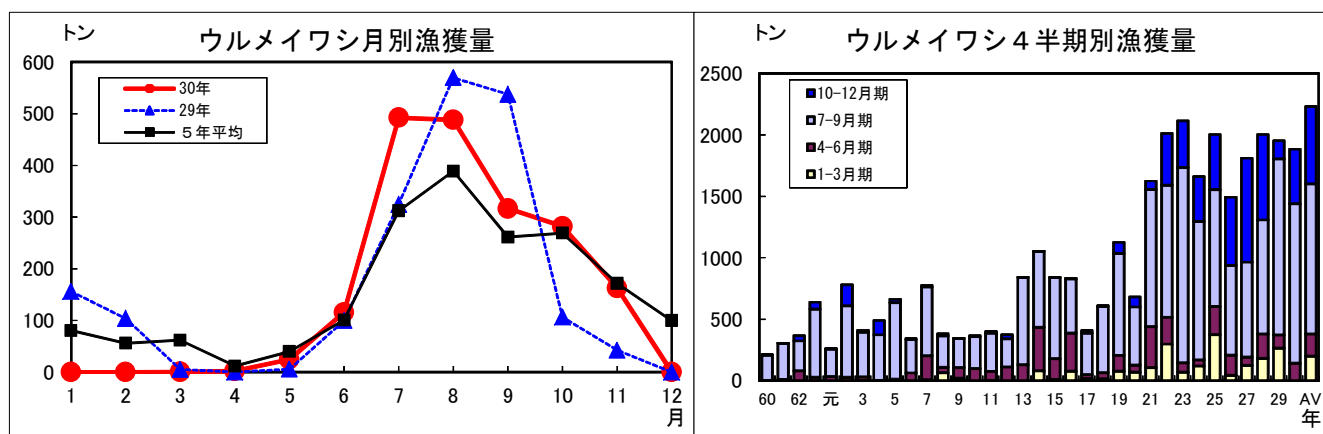


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

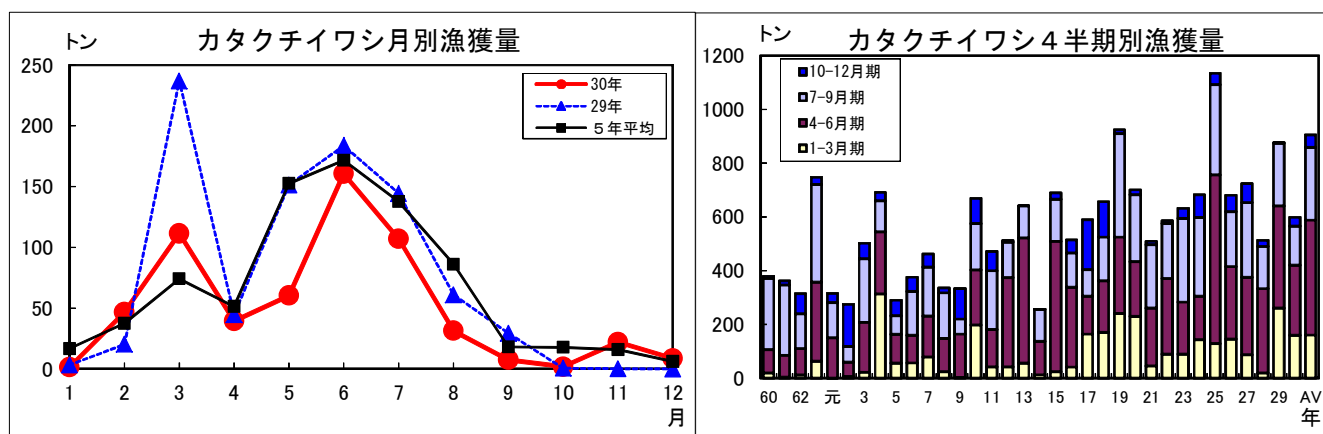


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年の平均値(AV), 平成30年11月30日までの水揚量を使用

[参考：漁況経過のみ記載]

〈ムロアジ類（クサヤモロ、モロ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の平成 30 年 10 ～ 12 月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成 2 年の 21,700 トンをピークに急減し、平成 6 年以降は、1,500 トンから 5,000 トンの間での推移しており、平成 29 年は 2,400 トンとなりました。

4 港計のまき網では、種子島南、島間沖、屋久島南でクサヤモロ中小、小主体の漁場が形成されました。期全体で 1,239 トンの水揚げで、前年の 149 % 及び平年の 87 % でした。

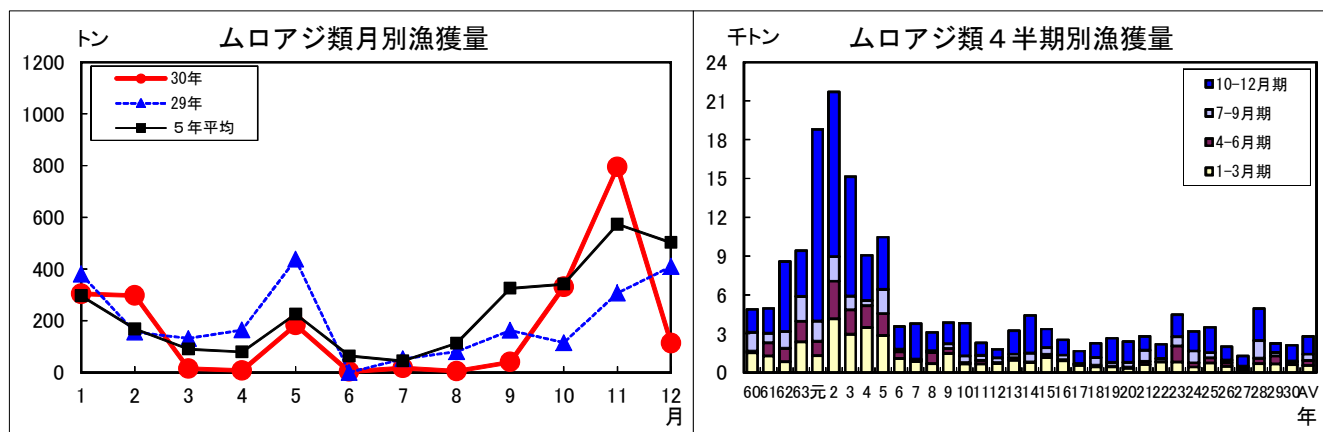


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去 5 年の平均値 (AV), 平成 30 年 12 月 26 日までの水揚量を使用

〈オアカムロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の平成 30 年 10 ～ 12 月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の 5,300 トンをピークに一旦減少し、平成 7 年に 4,400 トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成 20 年に一旦増加したあと再び減少傾向を示しましたが、平成 29 年は 1,576 トンとなりました。

4 港計のまき網では、屋久島南、種子島東、屋久新で中、小主体の漁場が形成されました。期全体で 581 トンの水揚げで、前年の 373 % 及び平年の 179 % でした。

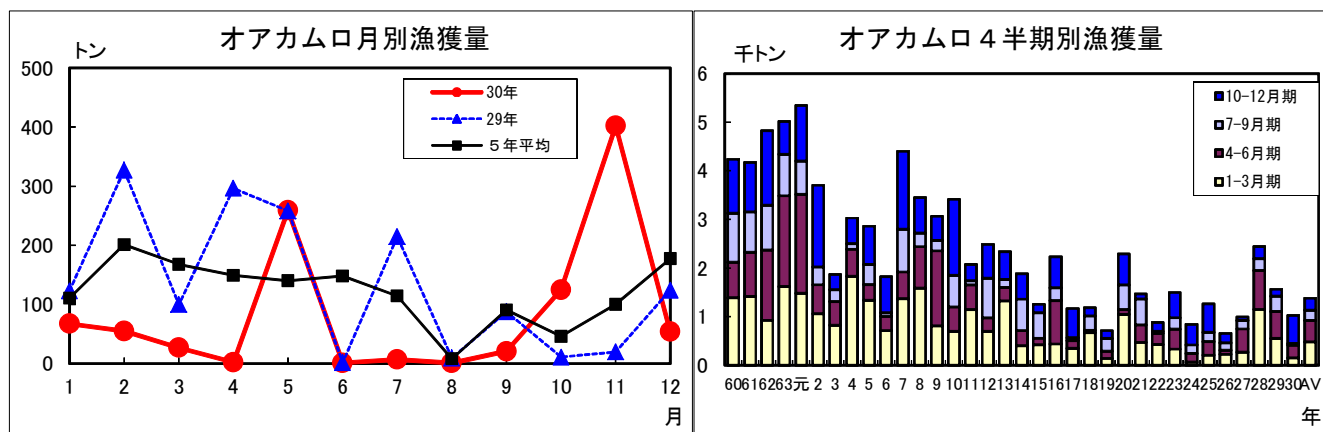


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去 5 年の平均値 (AV), 平成 30 年 12 月 26 日までの水揚量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4 港計）〉

県内の平成 30 年 10 ～ 12 月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は，昭和 62 年から平成元年に 1,500 トンを超えるピークがあり，その後低調に推移し，平成 12 年から 15 年に再度ピークを迎え 15 年には 3,150 トンと最高を記録しましたが，平成 16 年以降は低調に推移し，平成 29 年は 313 トンとなりました。

4 港計のまき網では，八代海，野間池沖で豆，中主体の漁場が形成されました。期全体で 62 トンの水揚げで，前年の 98 % 及び平年の 60 % でした。

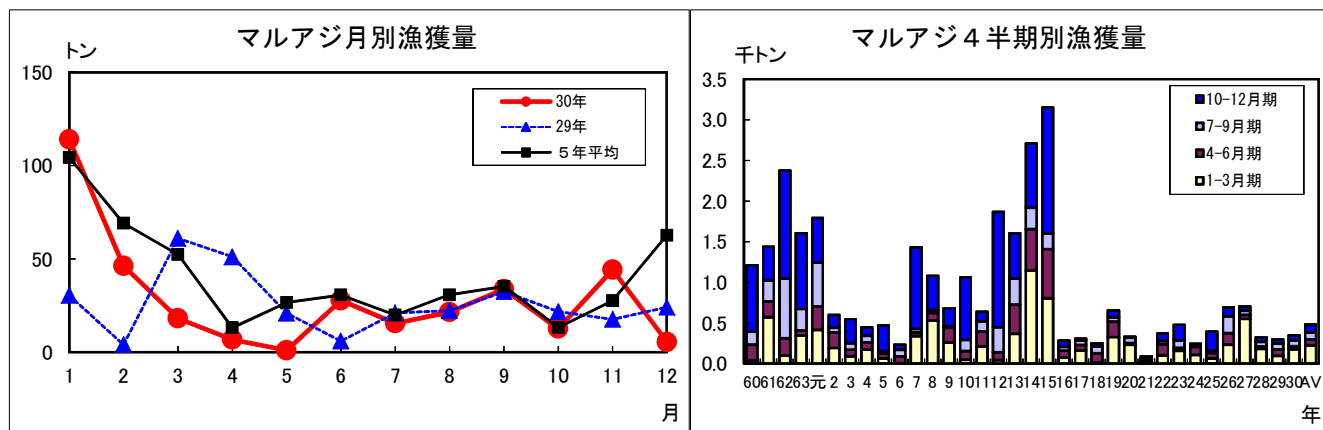


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年の平均値 (AV)，平成 30 年 12 月 26 日までの水揚量を使用